調査等事項報告（団体名：　改革クラブ　）

視察先	秋田県藤里町社会福祉協議会
視察日時	平成 30 年 5 月 28 日（月）13 時 30 分～15 時まで
視察項目	引きこもり支援について
視察者	菊池　大二郎・菊池　貞好・結城　正・犬飼　司
内　容	説明者 　藤里町社会福祉協議会指定居宅介護支援事務所 　主任介護支援専門委員　茂呂芙美子 　こみっと・就労支援部門 　サービス管理責任者　村岡佐由里 　藤里町は、秋田県最北部に位置し、世界自然遺産「白神山地」の麓の町である。人口 3,200 人、高齢化率 42％の過疎・高齢化が進んでいる町です。 　「ひきこもり」については、全国的に深刻な問題になる中、2006 年に行った調査で藤里町社会福祉協議会が一躍有名になりました。「ひきこもり」にあたる人が 100 人を数えるという調査結果と、藤里町社会福祉協議会が取組んだひきこもり支援は全国に衝撃を与え、その後の「ひきこもり」に関する理解の広がりに繋がりました。 　村山市でも潜在的に相当数の「ひきこもり」者を抱えていると想定されますが、実態の把握すら難しいです。藤里町社会福祉協議会において、町民全体に波及した「活躍の場」の提供方法について研修したく訪問しました。 　藤里町社会福祉協議会では、秋田県社会福祉協議会が 1980 年より展開してきた「小地域ネットワーク活動事業」のスローガンである「一人の不幸も見逃さない」を広い視野で地域のニーズを見つめることと理解し、地域住民、民生委員と解決にあたるとともに、戸別訪問を行う専門職（保健師・ホームヘルパー等）と連携して、早期発見・早期対応に努めています。「藤里方式」の特徴は、「報告・連絡・相談用紙」です。 　この用紙を利用し、利用者の困りごとを拾い、地域の福祉のニーズを見逃さない社会福祉協議会そしてその職員を目指しました。

	「ひきこもり」の調査もこの「報告・連絡・相談用紙」によりホームヘルパーなどが把握したニーズを報告したのがきっかけであったとのことでした。 生活困難者（ひきこもり等）の力を地域づくりに生かすシステムづくりとして、①生活困難者への情報提供のための家庭訪問員の配置、②社会復帰事業、③伴走型相談支援員の配置等の事業の中で、平成22年度「ひきこもり」者訪問対象者等対象者133人が、平成26年度末では、25人まで減少しました。 これほどまでに減少した最大の理由は、「ひきこもり者に対する家庭訪問」に対する細心の配慮を行い、一般の人との区別なく、「ひきこもり」者の人に求職支援事業の情報提供の取組みを根気強く取組んできたことの成果と感じてきました。 「ひきこもり」者の方を特別扱いするのではなく、対応することが必要で、一般の人と同様に考えることが必要であると感じてきました。 当市でも、藤里町社会福祉協議会が目指す「町民すべてが生涯現役を目指せる町づくりへの挑戦」、「福祉の立場からの地方創生」、「それは、弱者でも地方創生の担い手になれる」を、当市での地域福祉実践の枠組みや考え方をとらえ直し、藤里町社会福祉協議会に追いつき、「誰もが安心し暮らすことができる福祉のまちづくり」を推進していかなければなりません。
視察先	秋田県三種町
視察日時	平成30年5月29日（火）10時　～　12時30分まで
視察項目	じゅんさいの生産・販売事業について
視察者	菊池　大二郎・菊池　貞好・結城　正・犬飼　司
内　容	三種町はじゅんさい支援事業として以下の事業を展開しています。 日本一を誇るじゅんさいの生産量が単価の低迷及び農家の積み手不足により近年減少傾向にあることから、農家の生産意欲向上を図るため出荷量に対して助成を行い生産量の拡大を図っています。支援内容はじゅんさいの出荷数量1kgにつき30円の助成というものです。H29実績として申請者187件、出荷数量269,599.7kg、町補助金8,087,991円となっています。

	また、じゅんさい生産量の維持拡大のためじゅんさい圃場の整備費の一部を助成しています。支援内容は町内及び町内隣接地の圃場拡大、新設、再生、補修、改良事業に対して事業費の 1/3（限度額 100 万円）を助成しています。H29 実績は農家申請 8 件、町補助金 1,922,000 円になっています。 　さらに、じゅんさい摘み手育成による生産量の維持拡大を目的に、5 月から 6 月までにじゅんさい摘み手研修を開始し 20 日以上かつ 160 時間以上研修した場合に助成しています。支援内容は 70 歳以下で研修（平成 30 年度からは町外の方も対象）した方に 1 人 1 回限り研修奨励金 62,500 円を、就農奨励金として最長 3 カ月、月額 30,000 円（研修終了後引き続き農家雇用されて月 20 日以上収穫作業に従事）しています。 年間 1 人最大 152,500 円の助成を受けることができます。 また、受入れ農家助成を研修 1 人に対して 20,000 円助成しています。H29 実績は研修者 12 人、研修奨励金 750,000 円、就農奨励金 630,000 円になっています。 　そして、農薬使用拡大によるじゅんさいの品質向上と生産拡大を図るためアドマイヤー1 粒剤の散布回数を 1 回から 2 回に変更しています。 　じゅんさいの産業振興のために JGAP 認証の取得と拡大支援、国内外での商談、マーケティング調査また新たな分野への挑戦として水耕栽培、新商品開発など町を上げて取組んでいるようです。じゅんさい旬まつり、世界じゅんさい摘み採り選手権大会など多彩なイベントも盛りだくさんです。 　現地では豊岡金田地区の生産地を視察しました。じゅんさいを生産するには水の確保が最重要課題であるようです。 じゅんさいの摘み採り方もこだわりが見られ、ブランド力を高めているようでした。
視察先	秋田県湯沢市
視察日時	平成 30 年 5 月 30 日（水）9 時 30 分　～　12 時 20 分まで
視察項目	温泉熱や地熱温水の利活用事業について
視察者	菊池　大二郎・菊池　貞好・結城　正・犬飼　司
内　容	視察の目的 　当市には温泉が湧き出ており、入浴施設をつくり健康増進に役立てておりますが、余り湯や排湯があり、他の利用価値はないかと地熱利活用している湯沢市を訪れました。湯沢市は発電も行っていますが、今回は農産物の加工と栽培を視察見学しました。

	農産加工所についての概要 設置場所：湯沢市皆瀬字小湯の上4番地 整備事業名：第2次農業構造改善事業 施工：昭和55年12月 規格：鉄骨造平屋建　農産物加工施設292.5㎡　1棟 　　煮沸消毒槽2基（屋内1基＋屋外1基） 　　食品乾燥機2基 　　熱交換設備1式 事業費：64,058千円 　　（国庫補助30,202千円、旧皆瀬村負担33,856千円） 整備主体：皆瀬村（現湯沢市） 運営：皆瀬農産加工所利用組合（H23年度から指定管理） 取扱品目：切干大根、乾燥野菜（ナス、トマト、かぼちゃ、 　　リンゴ、さくらんぼ等）の製造、山菜の煮沸など 取組み内容 　源泉のすぐそばに施設があることで温泉が80度から90度に保たれるため、完全無添加で地熱の恵みだけで添加された乾燥野菜を製造しています。 切干大根の製造工程 ①源泉を直接消毒槽に入れ、大根の煮沸と熱消毒を行う。 ②熱交換器で熱を取り出し、その熱風を利用して乾燥を行い、排湯は地下へ戻す。 ・源泉は無味無臭なことから乾物に匂いや色が付着しない。 ・利用者は、H27年220人、H28年350人、H29年369人と年々増加傾向にある。 ・12月の利用が一番多く、切干大根生産のピークを迎える。 野菜栽培についての概要 設置場所：湯沢市皆瀬字中村地内 整備事業名：新農業構造改善事業 施工：昭和60年3月 規格：鉄骨ビニールハウス　約100坪×18棟 　　（うち2棟は土耕作） 　　熱水（源泉）利用機械設備一式 　　熱交換設備1式 　　（地熱水利用によるエロフィンチューブ放熱官2段配置） 　　8.0m×43.2m＝345.6㎡（105坪） 事業費：135,000千円 整備主体：皆瀬村農業協同組合（現こまち農協）

	運営：皆瀬地熱熱水利用組合（組合員数９名） 栽培作物：水耕みつば、水耕小ネギ、とまと（土耕）、 　　パクチー、レタス等 取組み内容 １　豪雪地域においても地熱活用による低コスト化で周年栽培を実現 ・放熱官をハウス内側に２段に設置して循環させている。入温度は82℃程度で出温度は20℃位になる。排水はハウス屋根の落雪融解に利用し、その後排出する。 ・ハウス内温度は、夏場は30℃に達する。冬場でも16℃以上を保っている。 ・地温は、夏場は27℃程度、冬場は13℃程度 ・湿度は冬場に80％になる時も有り調整が難しい。 ２　「地熱活用低コスト型周年農業実証」を株式会社ローソンと共同で実施 ・実施年度：平成26年度～平成29年度 ・支援：周年園芸普及拡大対策事業（秋田県） ・事業目的：年間を通じて収入を確保することが可能な周年農業を確立することで、農業所得の減少、特に当該地域は積雪寒冷地といった農産物生産にとって不利な気象条件に加え、燃料高騰による収益性の低下により、冬期の生産は減少している。株式会社ローソンと連携し地熱を利用した周年農業を確立することで経営の安定化を図る事を目的とする。 ・パクチーの水耕栽培については、種子消毒から収穫まで30～50日程度で冬期間は２倍の時間を要する。水耕栽培特有の茎の細さや弱さが出て、出荷先で“トロケ”の症状が発生している。 ・サンチュは生育は問題なく、安定した収穫が可能だが、需要や販売先が限定されるため、販路拡大が難しい。 ・トマトは夏場は順調に収穫量は確保されているが、冬場の日照不足で大きく収穫量が落ち込んでいる。夏場に高温障害もあったが、地熱水活用とは無関係。 総括 　碁点温泉の源泉や廃湯を用いての取組みは、源泉の温度が60℃前後と低く、食物が乾燥するまでは時間がかかり難しいのではないかと感じます。乾燥時間の長短によりカビや雑菌の繁殖が気になるところです。 　作物は、ハウス内の気温や地温、水温を保てば順調に育つと思われがちですが、日照時間や湿度の影響も大きく、特に

	日照時間の不足は作物の生育に多大な影響があることが判明しました。冬場の日照不足を解消するＬＥＤライトや天井が強化ガラスの施設が必要になると考えます。 　個人では難しい多額の初期投資をどこに求めるか、企業や各種団体等の援助が必要です。 　出荷先の確保や流通コストの削減を図らなければ利益はなかなか出ないと考えます。